



市民セミナーヨ 2018 第 11 回
外海の潜伏キリシタンの聖地・枯松神社

なぜ枯松神社は世界遺産になれなかったのか？

◆日時：2019年 **3月23日** (土) **13:30** 開演～15:30 終演

◆会場：浦上キリシタン資料館 コミュニティースペース



禁教期、外海地方に宣教したサンジワン神父ら先祖の遺徳を称え開かれる枯松神社祭

2018年6月に「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の世界遺産登録が決まった。本遺産は、日本初のキリスト教関連遺産であり、「物証」（不動産）よりも「独特の文化的伝統の在り方」といういわば無形の文化遺産に「顕著な普遍的価値」が見いだされている点に大きな特徴がある。つまり、物証そのものよりも「ストーリー」に価値が見出されているわけだが、そのストーリーや構成資産の妥当性には早くも疑問符が投げかけられている。その端的な例が長崎市外海地区にある枯松神社であり、また潜伏キリシタンの伝統を継承しているかくれキリシタンの存在だといえる。

講演第一部では、才津祐美子氏が「なぜ枯松神社は世界遺産になれなかったのか」という切り口から、世界遺産登録の仕組みや「潜伏キリシタン関連遺産」の問題点について解説する。

第二部では、外海・下黒崎で今なお潜伏キリシタンの信仰を守り続けている村上茂則氏が外海に伝わるバスチャン暦による信仰生活を解説し、オラシヨ（祈り）を披露する。

◆才津 祐美子 (さいつ・ゆみこ)

長崎県五島市生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得後退学。博士（文学）。2014年から長崎大学多文化社会学部准教授。長崎市文化財審議会委員なども務める。専門は民俗学、文化人類学。共著に『世界遺産時代の民俗学』（2013年、風響社）、『長崎—記憶の風景とその表象』（2017年、晃洋書房）などがある。主な研究テーマは近現代日本における地域文化の表象・継承・活用のあり方。とくに注目してきたのが「文化の遺産化／資源化」という問題である。現在は「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の世界遺産登録による影響に注目している。



◆村上 茂則 (むらかみ しげのり)

長崎市下黒崎町で、現在でも潜伏キリシタンの信仰を守る7代目の帳方（指導者）。父・茂は熱心な信仰者で勉強家。カトリックの教義を学び、オラシヨを声に出して祈り始め、帰天する前にカトリックの洗礼を受けた。茂則氏は父が残した「旧キリシタン書」を頼りに帳方を引き継いでいる。遠藤周作は小説「沈黙」を書くために、4代目帳方・村上近七の所に何度も酒を持参して取材に訪れたという。2017年、マーチン・スコセッシ監督が映画「沈黙—サイレンス」の公開PRで来日した際に、茂則氏と対談を行った。

◆参加料：500円 ◆定員：50名

◆申込：浦上キリシタン資料館宛に電話・ファックス・メールでお申し込みください。

◆主催：  アジェンダNOVAながさき (公財) 県民ボランティア振興基金支援事業

浦上キリシタン資料館

開館時間：10:00-17:00 休館日：月曜日（但し月曜が祭日の時はその翌日）

〒852-8116 長崎市平和町11-19

Tel&Fax 095-807-5646 E-mail: urakamicm@mx.a.cncm.ne.jp

■長崎電鉄「平和公園」停留所徒歩5分 ■県営バス「浦上天主堂前」徒歩1分